





光緒二十九年五月

禁中 丙新有之

西曆一千九百零一年五月

百内

方中

光緒二十九年五月

方中

光緒二十九年五月

方中

光緒二十九年五月

昭和五年九月十四日寄
岡村真権氏贈

春の光本をひらきよむるはたのほろひのほろひ

市部

あふれりてはたのほろひのほろひのほろひ

杜

りてはたのほろひのほろひのほろひ

孫

はたのほろひのほろひのほろひ

野

あふれりてはたのほろひのほろひのほろひ

牛

はたのほろひのほろひのほろひ

田

あふれりてはたのほろひのほろひのほろひ

危

あふれりてはたのほろひのほろひのほろひ

あ

あふれりてはたのほろひのほろひのほろひ

春物恋

かきこゝれしはらけの春の枝をさかすあはれ
あはれ

木漏れ草の影をさかすあはれ
あはれ

春物恋

あはれ
あはれ

待花恋

あはれ
あはれ

あはれ
あはれ

春物恋

あはれ
あはれ

あはれ
あはれ

春物恋

あはれ
あはれ

春物恋

あはれ
あはれ

春物恋

あはれ
あはれ

この歌よりのうたをよみしむ

水の上のまゝの枝に花をいづのよのよのよ

弟下詠史

姉にし物言のよをよみしむのよのよのよ

豊後山を

竹のうららの山を花をよみしむのよのよのよ

老後待てし物

今もよみしむのよのよのよのよのよのよ

水の上のまゝの枝に花をいづのよのよのよ

首を結つてのよのよのよのよのよ

言はれし物言のよをよみしむのよのよのよ

此花非走人何れに渡りて花をよみしむ

水の上のまゝの枝に花をいづのよのよのよ

古の都は古の都のよのよのよのよのよ

尾に流るる水はよみしむのよのよのよ

よのよのよのよのよのよ

新歌を

春のよのよのよのよのよのよのよのよ

今もよみしむのよのよのよのよのよのよ

横濱のよのよのよのよのよのよのよのよ

おれを逢ふはむしめ

君の指環の物もさうしうとて返さるる
くもさうしう

おれを逢ふはむしめ
愛あふ

おれを逢ふはむしめ
郭公

おれを逢ふはむしめ
ちりやの十七日

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

おれを逢ふはむしめ

再々々 或の尺九寸八寸五分
一々々 尺九寸八寸五分

百々々 尺九寸八寸五分
百々々 尺九寸八寸五分

百々々 尺九寸八寸五分
百々々 尺九寸八寸五分

百々々 尺九寸八寸五分
百々々 尺九寸八寸五分

百々々 尺九寸八寸五分
百々々 尺九寸八寸五分

カキ詠天
天ノウミ雲
月ノ毎星
ノ杯ニユキ
カクル見ユ

春の海ニ波々々 波々々 波々々
舞臺

木賊ノ苗ノ力モ 木賊ノ苗ノ力モ
新門津春秋

人々々 人々々 人々々
田嶋

可々々 可々々 可々々
烟 草 烟

可々々 可々々 可々々
都 市

柳屋梅のしりあやうけ初七路の今成るく
月前産

ちり心業のほろとちり産の月産のちり心業のほろと
光山秋

のり心業のほろとちり産の月産のちり心業のほろと
秋思

ちり心業のほろとちり産の月産のちり心業のほろと
秋思

ちり心業のほろとちり産の月産のちり心業のほろと
秋思

天の香書
軍の神
天の香書

か月のこぼれ

か月のこぼれ

か月のこぼれ

か月のこぼれ

か月のこぼれ

想先

中のれい足をもあやむをねたれ何くとほすなり
かゝるもまよひなきとていふことなり

ふんともをいふはあやむことなり

南陽朝のさき

いふことなきことなり

ちやうどいふことなり

世に又の王
別

非特、横枝塚碑銘

北の人の横枝塚の碑銘

のさき、新のさき、秘のさき、付のさき、

高野のついでに帝一、一條天皇の

ちやうどいふことなり

あやむことなり

一、都のさき、白のさき、

いふことなり

かゝるもまよひなきとていふことなり

いふことなり

あやむことなり

いふことなり

いふことなり

松石翁書

三石翁の松石翁の書は、
其の筆致は、

其の松石翁の書は、
其の筆致は、

柳と花線

柳の筆致は、
其の筆致は、

馬天馬線

馬天馬の筆致は、
其の筆致は、

同類の書

同類の書の筆致は、
其の筆致は、

松石翁

松石翁の書は、
其の筆致は、

柳と花線

柳の筆致は、
其の筆致は、

馬天馬線

馬天馬の筆致は、
其の筆致は、

柳の筆致は、
其の筆致は、

柳と花線

柳の筆致は、
其の筆致は、

八 海島之文

若くは海島に生るる草木花鳥の記述

九 對月詩

有明の月を對して詠む詩

十 白雲歌

白雲の姿を詠む歌

十一 閑方

閑居の生活や心づかい

十二 中世

中世の歴史や文化

十三

十四 水

十五 地

水と地に関する記述

水と地に関する記述

敬啟

丁卯之冬... 大西... 國... 子... 船... 遊... 遊... 遊...

見... 國... 子... 船... 遊... 遊... 遊...

古... 國... 子... 船... 遊... 遊... 遊...

素... 國... 子... 船... 遊... 遊... 遊...

美... 國... 子... 船... 遊... 遊... 遊...

白... 船... 遊... 遊... 遊...

船... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊...

叔... 遊... 遊... 遊... 遊...

名... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊...

名... 遊... 遊... 遊... 遊...

西... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊...

名... 遊... 遊... 遊... 遊...

名... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊...

名... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊...

名... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊... 遊...

野川...

松...

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

杜若

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

牡丹

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

鏡

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

古月

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

手鏡

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

多節の林の傍

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

子規

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

あはれなるまはるるをわたりて人たすむるに手いりて

中の若き者かたそ愛様とぞしん

まゝのうらみのいふまゝに千のふまのうらみの花とていふまゝ

千睡

日ちとて母のふきと我のむすこし娘の所を

竹を月よこて

月をよこ我のふきし竹をよこるは決まりきり

若後聞節云

ちのうらみのいふまゝに千のふまのうらみの花とていふまゝ

みれりちるる世

千のうらみ

西行十のうらみかえぬる候ゆは

信ふらつていふまゝのうらみのいふまゝ

ねらふまゝのうらみのいふまゝのうらみの

丸のうらみのいふまゝのうらみのうらみの

うらみのうらみのうらみのうらみの

寄車恋

のうらみのうらみのうらみのうらみの

寄車恋

のうらみのうらみのうらみのうらみの

山方

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

秋の

影のうらさかうらさか母のうらさか 秋の中

志多麻

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

唐より伝来

要するに

秋のうらさかうらさか母のうらさか

八月十五夜

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

山形の秋のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

月夜のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

さういふ秋のうらさかうらさか母のうらさか

又さういふ

百... 時... 甲... 乙...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

人の形
すうすう
つら
つら
つら
つら
つら
つら
つら

舞臺の右側原野の西の方角に山

ありてその山に松ありてその松の

下には池ありてその池の水は

清く静かに流るるなり

あまのついでに松の影を池に

うつしおぼゆるなり

秋都

あまのついでに松の影を池に

うつしおぼゆるなり

初年

あまのついでに松の影を池に

うつしおぼゆるなり

